

山口ステイブ 「トラベル東北社長」

日本は宝の山なのに、日本人は知らない



1960年、米国カンザス州生まれ。妻の実家の建設会社の経営を経て、観光業に参入。それまでにない自由な発想のツアー作りで注目を集めている



日本には世界に類を見ない技術や文化など、価値あるものがたくさんあります。しかし、日本人はそれを生かし切れていません。実にもったいないことです。

私は、日本の歴史や文化に興味を持って1985年に日本に留学。その後、三菱商事で6年半働きましたが、妻と出会って会社を辞めました。妻の実家は山形県の

建設会社で、義父から養子縁組みして後を継ぐことが結婚の条件と言われたからです。入社3年目に義父が亡くなり、それから13年、2代目として業績を伸ばしましたが、小泉改革による受注急減を受け、2007年に会社を清算しました。

次に挑んだのが観光業です。山形には世界に誇れる自然と文化的な資産がたくさんあるのに、放ったらかしにされていると感じていました。そこで、業績不振だった地元の旅行代理店を買収し、自由な発想で他にないツアーを企画できるように意識改革をしました。

例えば、「おくのほそ道」には観光バスも素通りする10kmの「忘れられた区間」があります。私はそこに目を付けました。参加者に松尾芭蕉になった気分その野山を歩いてもらい、五感で自然を感じられるツアーを企画しています。

日本の企業に必要なのは「自分

の力で新しいニーズを作り出す」気概です。護送船団方式や補助金など、長年、行政が産業を引っ張ってきた日本では、企業も「お上」に頼る習性が染み付いています。

トラベル東北は、宮城県の松島で津波で流された漁具を作り直すボランティアツアーも実施しています。そこで感じるのは、過疎地はその行政から見放され復興から取り残されている、ということだと思います。私は建設会社時代のツテをたどって、誰でも組み立てられる安価なユニット式の建物を開発。外資系食品メーカーの資金援助を受け、10月に3棟をつないで仮設集会所として地元を提供します。いずれは店舗などに転用できます。

今後も資金援助を募り、被災地に広く提供していきます。官頼みではなく、「民」の力を合わせれば、地域経済の再生もできることを示したいと思います。